

【原 著】

1 年次保育実習前後における実習生の子どもイメージ、
学習の継続意志の変容に関する探索的研究

三島 知剛 山田 洋平

Exploratory Research on the Effects of Nursery Teacher Training for Freshman on
Practice Teachers' Changes in the Image of Children and Sustainable Volition for Learning

MISHIMA Tomotaka, YAMADA Yohei

2021

岡山大学教師教育開発センター紀要 第11号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.11, March 2021

1 年次保育実習前後における実習生の子どもイメージ、 学習の継続意志の変容に関する探索的研究

三島 知剛※1 山田 洋平※2

本研究の目的は、1年次における保育実習前後の実習生の子どもイメージ並びに学習の継続意志の変容について、進路希望に着目しつつ検討することであった。そのため保育実習に参加した実習生を対象に調査を行い最終的に31名を分析対象とした。主な結果として、(1) 子どもイメージについて、進路希望に関わらず8因子のうち「批判性」の得点が実習後に高くなること、(2) 学習の継続意志について、4カテゴリーのうち、「教育・保育を行う」「学級担任としての仕事」について交互作用が見られ、「保育士または幼稚園教諭」を志望する学生は実習後に得点を低下させること、(3) 学習の継続意志の「園組織の一員としての仕事」について交互作用が見られ、「保育士または幼稚園教諭」を志望する実習生は実習後に得点を低め、その他の進路希望の実習生は実習後に得点を高めること、が示された。

キーワード：1年次保育実習、実習生、子どもイメージ、学習の継続意志、進路希望

※1 岡山大学教師教育開発センター

※2 島根県立大学

I 問題と目的

本研究の目的は1年次における保育実習前後の実習生の子どもイメージ、学習の継続意志の変容について、学生の進路希望に着目しつつ検討することであった。

子どもを取り巻く環境や社会の大きな変化、また将来の見通しが持ちにくい昨今において教育の重要性が一層高まっていると考えられる。我が国においては義務教育としては小学校から開始されるが、義務教育以前の段階の教育も重要であり、幼小の連携の必要性や小1プロブレムなどの問題に代表されるように幼児教育についての重要性も一層増してきていると考えられる。例えば中室(2015)は幼児教育の重要性について論じる中で、シカゴ大学のヘックマン教授らの研究業績について紹介する中で就学前プログラムに参加した子どもたちは小学校入学時点のIQが高かっただけではなく、その後の人生において、学歴が高く、雇用や経済的な環境が安定しており、反社会的な行為に及ぶ確率も低かったことを紹介している。そして、幼児教育への財政支出は社会全体でみても、非常に割のよい投資であるといえると述べている。

一方、幼児教育を実施する主要な場として幼稚園が挙げられると考えられるが、近年は、幼稚園のみならず認定こども園、保育所も重要な幼児教育施設であると考えられ、幼稚園のみならず様々な幼児教育施設における幼児教育の重

要性が増していると考えられる。すなわち、幼稚園教諭はもちろんのこと保育士に求められる専門性も一層高くなってきていると考えられる。

このように幼稚園教諭や保育士など幼児教育に携わる人への高い専門性や力量が求められる一方で、それらを育てる養成段階の重要性も一層高まっていると考えられる。そして、幼児教育の担い手としての力量形成の主要な場の一つとして幼稚園や保育所等の保育・教育施設を場として体験的に学ぶ実習の機会が重要であると考えられる。保育所実習の目的は、2015年の厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知によると、「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする。」とされている。保育実習によって実習生の保育者効力感が高まることが田爪（2018）や神谷（2009）によって明らかにされている。また、保育実習ではないが、教育実習によって実習生の授業などのイメージ変容や、教師効力感の向上、教師としての力量が形成されるなど教育実習の効果がこれまで指摘されている（立石，2018；春原，2007；米沢，2010）。これらの知見を踏まえると、教育実習や保育実習が実習生にとって重要な学びの場であると言えるだろう。

一方、教育実習の効果や培うべき教師としての力量としては様々なものがあると考えられるが、本研究では子どもイメージ並びに学習の継続意志に着目することとした。イメージは、教師や教員志望学生の実践的知識において彼らの実践を方向づけ、彼らが実践場面を解釈する中核的な役割を果たす（深見，2006）とされている。さらに、Elbaz（1981）は、イメージは、教師の行動を直観的に導くものと定義している。教育実習生を対象に子どもイメージの変容を検討した研究がなされていること（例えば、三島，2007）や、保育実習においても子どもイメージに着目した研究が散見される（上長，2010；岡田，2007）ことから保育実習において着目すべき重要な観点と考えた。

また、三島・安立・森（2009）は浅野（2002）を参考に長期的に学習を継続したいとする意志力を「継続意志」と定義し実習前後における実習生の学習の継続意志の変容を検討している。「学び続ける教員」像（文部科学省，2015）に照らせば、教師や保育士になる上で所定の学習内容をその場限りのものとするのではなく、長期的に学び続けていこうとする意志力を高くもっておくことは実習生にとって重要であると考え、保育実習の前後においても検討すべきであると考えた。

また、本研究では1年次保育実習に参加する実習生を対象としている。1年次の保育実習は一般的には具体的な実践というよりも観察がメインとなると考えられる。実習生にとっては初めての实習になり、学校現場に行き実際に子どもを将来教諭や保育士を目指す実習生として一定期間観察するのは初めての経験と言える。初めての保育実習経験により学生の子どものイメージや学習の継続意志がどのように変容するのかを検討することは保育実習の効果やその後の大学での実習生の成長の可能性や養成のプログラムを検討する上で一つの資料となると考えられる。さらに、本研究では実習生の進路希望にも着目すること

とした。保育実習に参加する学生にとって実習先が自己の将来の進路希望先と一致するかどうかということが子どもイメージや学習の継続意志の変容と関連する可能性を検討するためである。

II 方法

1 調査時期・協力者

A 県内公立大学において 2019 年度の 1 年次保育実習を受講した学生を対象に実習前（2020 年 2 月）と実習後（3 月）に調査を行った。このうち、実習前後で 2 回とも回答が得られた 33 名を分析対象とした。

本実習は、2020 年 2 月から 3 月に行う 10 日間の保育所実習である。実習は 0 歳から 6 歳まで保育所保育指針が示す 8 つの年齢区分の保育に参加できるように計画され、実習生は参与観察を行いながら、保育に必要な知識・技能を体験的に学ぶ。本実習の中で、部分保育など指導案の作成を伴う保育活動は行われていない。学生にとっては初めての実習である。

なお、倫理的配慮として、調査用紙配布時に、研究の目的、調査協力は任意であり協力しないことで授業評価などの不利益を被ることは一切ないこと、調査結果は個人が特定されないように処理すること、調査で知り得た情報は研究以外では使用しないこと、調査用紙への回答をもって調査協力への同意が確認されることを調査協力者に口頭で伝えた。

2 調査内容

(1) 子どもイメージに関する項目

三島（2009）において用いられている項目を用いた。「子どもは～のようである」という文章からなり、～の比喩項目にどの程度そう思うかを問う尺度で、全 36 項目からなる。先行研究によって、明るく汚れのない無垢なイメージ（項目例：天使）である「純粋性」、不正に敏感であるというイメージ（項目例：裁判官）である「批判性」、伸びていくなどこれから成長していくイメージ（項目例：つくし）である「成長性」、自己中心的であり複数の側面をもつというイメージ（項目例：一匹狼）である「自己中心性・二面性」、創造力をもっているというイメージ（項目例：発明家）である「創造性」、かわいらしい、愛らしいというイメージ（項目例：ネコ）である「愛らしさ」、考えていることが分からないといったイメージ（項目例：宇宙人）である「悲観的・不信」、繊細で変化しやすいというイメージ（項目例：ガラス）である「繊細さ」、の全 8 因子であることが見出されている。本研究においても先行研究の尺度をそのまま用いることとした。なお、回答は全て「1. 全くそう思わない」～「5. 非常にそう思う」の 5 件法で求めた。

(2) 学習の継続意志に関する項目

保育士や幼稚園教諭を目指すうえで学習すべき内容として、保育教諭養成課程研究会（2015）において幼稚園教諭・保育教諭の職務内容に対して必要な研

修として示されているものを項目化し用いた。なお、保育教諭養成課程研究会（2015）においては、職務内容として「教育・保育を行う」「学級担任としての仕事」「園組織の一員としての仕事」「地域の子育て支援としての仕事」の4つに分類し、それぞれに必要な研修を示している。そこで、本研究においてもその4つの分類にならない分析では4カテゴリーで検討することとした。項目化にあたっては学生の回答のしやすさを考え、表現を一部修正（例：「5領域の内容及び総合的な指導」とされているものを、「保育内容（健康）」「保育内容（人間関係）」「保育内容（環境）」「保育内容（言葉）」「保育内容（表現）」「保育内容5領域の総合的な指導」と項目化）するなどを行い、31項目とした。なお、回答は全て「1. 全くそう思わない」～「5. 非常にそう思う」の5件法で求めた。

（3）卒業後の進路希望について

卒業後の進路希望について選択式で回答を求めた。選択項目としては（1. 保育士， 2. 幼稚園教諭， 3. 小学校教諭， 4. 公務員， 5. 民間企業， 6. 大学院進学， 7. その他）とした。

Ⅲ 結果

ここでは、進路希望と子どもイメージ、学習の継続意志の関連について検討する。そのため、実習前の調査時の回答を基に卒業後の進路希望群として保育士、もしくは幼稚園教諭を選択した学生とその他の項目を選択した学生の2群に分類した。本研究の対象者が実施した実習は保育所の実習であるため、保育士志望の学生にとっては将来の進路に関連の強い経験であると考えられる。また、幼稚園教諭志望の学生にとっても保育士の資格は保育所や幼稚園からの認定こども園への移行のことも見据えて取得が一般的になっていると考えられることから保育士志望学生と同様に保育所での実習はより進路希望と関連が強い経験であると考えられる。そこで、保育士と幼稚園教諭を一括りのグループにした。一方、その他の回答を選択した学生にとっては、進路希望との関連は保育士志望や幼稚園教諭志望学生と比べると弱いと考えられる。そこで、進路希望について回答がなかった2名を除き、「保育士または幼稚園教諭群」19名、「その他群」12名に分類された。なお、その他に分類された学生は全員小学校教諭を選択していた。

次に、子どもイメージ、学習の継続意志、に関する各因子及び各カテゴリーの得点についてそれぞれ進路希望群×時期の2要因分散分析を行った。以下にそれぞれ結果を記述する。

まず、子どもイメージの結果について記述する。分散分析の結果（表1）、「批判性」において時期の主効果が見られ（ $p < .05$ ）、実習後に得点が上昇するという結果であった。なお、その他の因子に関しては主効果、交互作用共に見られなかった。

次に、学習の継続意志の結果について記述する。分散分析の結果（表2）、全カテゴリーにおいて有意もしくは有意傾向である交互作用が見られた。また、「教育・保育を行う」については群の主効果が見られ ($p < .01$)、「保育士または幼稚園教諭群」の方が得点が高かった。交互作用が見られたため単純主効果の検定を行った。その結果、「教育・保育を行う」において実習前後ともに「保育士または幼稚園教諭群」の方が得点が高かった。また、「保育士または幼稚園教諭群」における時期の主効果が見られ実習後に得点が下がっていた。また「学級担任としての仕事」において実習前において「保育士または幼稚園教諭群」

表1 進路希望群ごとの実習前後における子どもイメージの各因子の平均値と標準偏差、及び2要因分散分析結果

	実習前		実習後		F値		
	保育士または幼稚園教諭群	その他群	保育士または幼稚園教諭群	その他群	群	時期	交互作用
純粋性	4.14 (0.80)	3.83 (0.78)	3.98 (0.94)	3.81 (1.35)	0.5	0.47	0.23
批判性	2.12 (0.77)	2.21 (0.91)	2.43 (1.04)	2.58 (0.99)	0.14	5.24*	0.04
成長性	2.97 (0.94)	2.71 (0.90)	3.01 (0.89)	3.01 (1.04)	0.16	1.16	0.65
自己中心性・二面性	1.67 (0.70)	1.65 (0.75)	1.77 (0.69)	1.65 (0.63)	0.09	0.22	0.22
創造性	3.37 (0.91)	3.29 (0.86)	3.16 (1.06)	3.31 (1.13)	0.01	0.26	0.39
愛らしさ	2.42 (1.04)	2.39 (1.13)	2.32 (1.05)	2.53 (1.19)	0.05	0.02	0.98
悲観的・不信	2.33 (0.80)	2.20 (0.97)	2.30 (1.03)	2.35 (0.91)	0.01	0.18	0.36
繊細さ	2.76 (0.99)	2.71 (1.10)	2.80 (1.20)	2.94 (1.17)	0.01	0.98	0.49

括弧内は標準偏差

* $p < .05$

表2 進路希望群ごとの実習前後における学習の継続意志の各カテゴリーの平均値と標準偏差、及び2要因分散分析結果

	実習前		実習後		F値		
	保育士または幼稚園教諭群	その他群	保育士または幼稚園教諭群	その他群	群	時期	交互作用
教育・保育を行う	4.83 (0.22)	4.34 (0.45)	4.68 (0.28)	4.39 (0.34)	13.42**	0.78	3.10 † 前・後：保育士または幼稚園教諭群 > その他群 保育士または幼稚園教諭群：前 > 後
学級担任としての仕事	4.78 (0.31)	4.43 (0.49)	4.58 (0.32)	4.60 (0.26)	2.17	0.05	6.20* 前：保育士または幼稚園教諭群 > その他群 保育士または幼稚園教諭群：前 > 後
園組織の一員としての仕事	4.56 (0.46)	4.19 (0.39)	4.38 (0.45)	4.38 (0.44)	1.44	0.01	6.24* 前：保育士または幼稚園教諭群 > その他群 保育士または幼稚園教諭群：前 > 後、その他：前 < 後
地域の子育て支援としての仕事	4.74 (0.34)	4.56 (0.39)	4.56 (0.39)	4.67 (0.36)	0.11	0.15	2.95 †

括弧内は標準偏差

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

の方が得点が高かった。また、「保育士または幼稚園教諭群」における時期の主効果が見られ実習後に得点が下がっていた。また、「園組織の一員としての仕事」において実習前において「保育士または幼稚園教諭群」の方が得点が高かった。また、両群における時期の主効果が見られ、「保育士または幼稚園教諭群」は実習後に得点が下がり、「その他群」は実習後に得点が上がっていた。なお、「地域の子育て支援としての仕事」については単純主効果の検定の結果、有意もしくは有意傾向が見られなかった。

IV 考察

以上の結果より、以下では、本研究の知見を整理し、結果について考察を行う。

1 子どもイメージの変容について

子どもイメージについて、有意な変容が見られたのは、「批判性」のみであり進路希望群による違いはなく、全体的に実習前後で得点が高まるという結果であった。教育実習前後における子どもイメージの変容については、三島(2007)、三島(2009)並びに三島・石川・森(2013)などで知見が蓄積されている。これらの先行研究では、実習前後で複数の子どもイメージの因子の得点に変容することが明らかにされている。また、本研究と同じく比喻項目によって実習生の実習前後の子どもイメージの変容を検討している三島(2009)並びに三島他(2013)において「批判性」が実習前後で変容し得点が高まることが指摘されている。両研究では、いわゆる主免実習の学生を対象にしていることや、小学校における実習生が対象であることから単純に本研究の結果と比較することには注意が必要であろう。しかし、3年次のいわゆる教壇実習を伴う数週間におわたる教育実習経験による結果と同様に1年次保育実習前後においても子どもイメージの「批判性」が上昇するというのは、学生が子ども理解を深めてきている結果と考えられ、本調査で対象となった保育実習の一定の成果を示唆するものであろう。

子どもイメージの変容に影響する要因についての知見として、三島(2009)が見られる。三島(2009)は、子どもイメージの変容に影響する他者との関わりについて検討している。その中で、「批判性」が高まることに影響する児童との関わりとして、児童との批判的な関わりに対する有用度を見出している。児童との批判的な関わりとしては、「児童に馬鹿にされたり生意気な態度をとられた」「自分の授業に対する失敗や欠点を児童から指摘された」などの項目が含まれる。本研究で対象とした1年次保育実習では授業は行っておらず、観察がメインであるものの、幼児と関わる経験はしていると考えられる。その中で幼児から自分の失敗を指摘されたり、生意気な態度をとられるといったことも想定される。また、幼児に対して指導教諭が行っている実践を部分的に補助する中で、間違いや失敗を指摘されるといったことも生じ得ると考えられる。本研究で批判性が実習後に高まるという結果であったが、三島(2009)の知見を踏まえると、先述のような経験に実習生が意義を見出したということも影響して

いることが可能性の一つとして考察できると考える。

一方で、その他の因子については変容が見られず、ポジティブな側面についての変容も見られなかった。ポジティブな側面においても教育実習後に上昇するという知見が三島(2007)、三島他(2013)によって見られているが、本研究では1年次であることや実習期間が先行研究に比べ短いことなど先行研究とは異なる。そのため、ネガティブポジティブの両側面の子どもイメージの変容までは見られなかったのであろう。また、幼稚園教育実習における保育学生の子どもイメージの変容を検討したものに古田(2014)がある。本研究のように比喩項目を用いたものではないが、結果としては全体的な子どもイメージの変容は見られなかったもののいくつかの項目においては有意な変容が見られたとしている。その中で、漠然とした幼児は「明るい」というイメージが直接的な関わりにより、そうでない時や場合もあることに気づいたことが得点として反映されたと推察されるとしている。本研究においても古田(2014)で述べられているようなことが関係している可能性が考えられる。

2 学習の継続意志の変容について

学習の継続意志について、「教育・保育を行う」「学級担任としての仕事」「園組織の一員としての仕事」の3カテゴリーにおいて「保育士または幼稚園教諭群」の学生の得点が実習後に低下していた。得点が低下しているということから、実習生が学習への意欲を減退させたという解釈も可能性の一つとして考えられるものの、可能性の高い解釈として、これらの内容については、実習で学べたため学びへの必要性を低下させたことや他に学ぶべき内容があるため相対的な優先度を低下させたという可能性を挙げたい。調査対象や調査項目は本研究と異なるものの、実習生の実習前後の学習の継続意志について検討した三島他(2009)において、「実践的内容」について実習前後で変容が見られた項目については、上昇する項目は見られず、低下する項目のみであったことが示されている。そして、実習である程度身についたため関心が薄まった可能性に言及している。また、同じく三島他(2009)において、「理論的内容」についてはいくつかの項目で得点が上昇したことから理論的学習内容の必要性を実習生が感じるようになった可能性が言及されている。また、対象や時期は本研究とは異なり学習の継続意志としての検討ではないものの、実習生が教師として必要と考える資質・能力の内容は実習前半と後半で異なる傾向がみられることが渡邊・麻生(2017)によって報告されている。これらの知見から実習前後において学習の継続意志が変容することが明らかにされているが、1年次の観察をメインとする保育実習前後においても変容するということなのであろう。

また、本研究において得点が実習後に下がったという結果が得られたが、実習前の時点で得点がかかなり高かった。有意差は得られたものの実習後においても相対的に見ると得点は5段階の4を上回っている。そのため、学び続けたいと思う程度は実習前後で低下したものの、依然として実習後も学び続けることの重要性を認識することは変わっていないという解釈も必要と考えられる。

保育士または幼稚園教諭を志望する学生にとって、本研究で変容が見られた3 カテゴリーはいずれも将来の職業に直結した学習内容であると考えられる。また、教育実習においてもこういった3 カテゴリーについての教員の仕事の様子を観察したり、補助的に関わる機会を持つことが予想される。そのため、ある程度学ぶことができたと考え、学習への必要性を実習前よりは低下させた可能性が考えられる。

また、「園組織の一員としての仕事」については、「保育士または幼稚園教諭群」の学生の得点は実習後で低下するものの「その他群」学生の得点は実習後で上昇していた。この結果について、「保育士または幼稚園教諭群」の学生の得点が上昇した原因については、「保育士または幼稚園教諭群」においては変容のあった2 カテゴリーと同様に実習においてある程度学べたことよりその必要性を低下させた可能性が考えられる。一方で、「その他群」においては事前の得点が「保育士または幼稚園教諭群」より低かったこともあり、学習の必要性についての認識を高めた可能性が考えられる。

最後に変容の見られなかった「地域の子育て支援としての仕事」について考察する。このカテゴリーについても保育士や幼稚園教諭を志望する学生にとっては、必要性が高い学習内容であることは他の3 カテゴリーと同様であろう。しかしながら他の3 カテゴリーと比べるとやや周辺的な内容であり優先度が低くなる可能性が考えられ、教育実習中においても経験する機会が他の3 カテゴリーに比べて少ないことが予想される。そのため、「地域の子育て支援としての仕事」については他の3 カテゴリーとは異なり得点が低下しなかった可能性が考えられる。

本研究において実習前後の変容について十分な解釈をすることは難しいものの先行研究の知見も踏まえると、「保育士または幼稚園教諭群」の得点が実習前後で低下するという結果については保育実習による教育効果によるものと解釈できるのではないかと考える。一方で、学習の継続意志については、固定的ではなく揺れ動く可能性も考えられる。姫野(2013)は、教師に求める知識・能力・人間性に関して項目を列挙し、各々について教師に求めるかどうかを尋ね、「とてもそう思う」と回答した割合に着目して変容過程を探索する中で、学生が教師に求める知識・能力・人間性は、教育実習を始めとする様々な経験により、ゆれ動いていることが分かったと述べている。姫野(2013)の知見を踏まえると、本研究で変容が見られたカテゴリーや変容の見られなかったカテゴリーの得点について今回の変容で今後の得点も維持されるとは限らず、今後の様々な経験により上昇や低下をする可能性も考えられる。しかしながら、得点に変容するという事はそれだけの教育効果が保育実習にあったということなのであろう。

V まとめと今後の課題

本研究の目的は1年次における保育実習前後の実習生の子どもイメージ、学習の継続意志の変容を学生の進路希望に着目しつつ検討することであった。進

路希望に関わらず、実習生の子どもイメージのうち「批判性」が上昇することや、保育士または幼稚園教諭を志望する学生の方が実習後に学習の継続意志の「教育・保育を行う」「学級担任としての仕事」「園組織の一員としての仕事」の得点を低下させること、保育士もしくは幼稚園教諭を志望しない学生は「園組織の一員としての仕事」の得点を実習後に高めること、が示唆された。1年次保育実習が実習生に与える影響の一端が明らかにできたと考えられる。

最後に今後の課題について記述する。1つはサンプル数の問題である。今後、さらにサンプル数を増やし知見を蓄積していくことが必要と考えられる。また、回帰効果の可能性についてである。結果について元々得点が高い人は得点が低下し、得点が低かった人は得点が上昇してどちらも平均値に近づくという回帰効果の可能性も解釈の一つとして考えられる。特に学習の継続意志については実習前の時点で得点は高い傾向にあるため、天井効果の可能性も考えられ、回帰効果が生じている可能性も考えられる。本研究からはその点については明らかにできないが、可能性の一つとして記述をしておきたい。

就学前教育が重要であることはゆるぎない事実と考えられるが、求められることや期待は一層増してきていると考えられる。引き続き知見を蓄積していくことが必要と考えられる。

謝辞

ご多用の中、本調査にご協力いただきました学生の皆さんに心よりお礼申し上げます。

引用文献

浅野志津子（2002）学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程—放送大学学生と一般大学学生を対象とした調査から—。教育心理学研究，50：141-151

ELBAZ, F. (1981) The Teacher's "Practical Knowledge": Reprt of a Case Study. *Curriculum Inquiry*, 11:43-71

深見俊崇（2006）教師・教員志望学生の実践イメージに関する研究動向と課題。大阪市立大学大学院文学研究科紀要人文研究，57：78-95

古田康生（2014）幼稚園教育実習による保育学生の子どもイメージの変容。環太平洋大学研究紀要，8，1-5

春原淑雄（2007）教育学部生の教師効力感に関する研究—尺度の作成と教育実習にともなう変化—。日本教師教育学会年報，16，98-108

姫野完司（2013）学び続ける教師の養成—成長観の変容とライフヒストリー—。大阪大学出版会

保育教諭養成課程研究会（2015）幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイド—質の高い教育・保育の実現のために—。 <http://youseikatei.com/pdf/20150609.pdf>（参照日：2020.10.20）

上長然（2010）保育者養成課程学生における保育実習を通した「こども」イメ

- ージの変容. 近畿大学豊岡短期大学論集, 7, 31-39
- 神谷哲司 (2009) 保育者養成系短期大学生の保育者効力感の縦断的变化—実習時期と就職活動を通じた進路選択過程に着目して—. キャリア教育研究, 28, 9-17
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知 (2015) 指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について. <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-1900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000108972.pdf> (参照日: 2020.11.20)
- 三島知剛 (2007) 教育実習生の実習前後の授業・教師・子どもイメージの変容. 日本教育工学会論文誌, 31, 107-114
- 三島知剛 (2009) 教育実習中の他者との関わりと教育実習生の授業・教師・子どもイメージ, 授業観察力の変容. 日本教育工学会論文誌, 33, 71-81
- 三島知剛・安立大輔・森敏昭 (2009) 教育実習生の実習前後における学習の継続意志の検討. 日本教育工学会論文誌, 33 (Suppl.), 69-72
- 三島知剛・石川裕敏・森敏昭 (2013) 教職志望学生のフレンドシップ参加経験と授業・教師・子どもイメージ及び教育実習前後の変容との関係. 日本教育工学会論文誌, 36, 407-418
- 文部科学省 (2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について—学び合い, 高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて— (答申). https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (参照日: 2020.11.23)
- 中室牧子 (2015) 「学力」の経済学. ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 岡田恵子 (2007) 医療保育科学生の保育所実習前後の子どもイメージ, 心理社会的発達の変化とこれらの関連性. 川崎医療福祉学会誌, 16, 377-384
- 立石力斗 (2018) 教育実習での知的障害のある児童・生徒との関わりによる授業・教師・子どもイメージの変容. 日本教育工学会論文誌, 42 (Suppl.), 189-192
- 田爪宏二 (2018) 4年制大学における保育実習の体験および就業意識における保育者効力感の影響—実習の進行による変化—. 京都教育大学紀要, 132, 33-45
- 渡邊和志・麻生良太 (2017) 教育実習における実習生の教職への意識の変容に関する研究—実習前・中・後の調査を通して—. 大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 35, 161-174
- 米沢崇 (2010) 教育実習における教師としての力量形成に対する教職志望学生と初任者の意識の検討. 奈良教育大学紀要 人文・社会科学, 59, 237-244

Exploratory Research on the Effects of Nursery Teacher Training for Freshman on Practice Teachers' Changes in the Image of Children and Sustainable Volition for Learning

MISHIMA Tomotaka*1, YAMADA Yohei*2

The purpose of this study is to investigate the effects of nursery teacher training for freshman on practice teachers' change in the image of children and sustainable volition for learning, focusing on the practice teacher's career planning. In total, 31 practice teachers participated in a questionnaire. Major findings were as follows. (a) Practice teachers increased the score of "critic" image of children after nursery teacher training. (b) Practice teachers who want to be nursery/kindergarten teacher decreased the scores of "practice education and childcare" and "work as a classroom teacher" of sustainable volition for learning after nursery teacher training. (c) Practice teachers who want to be nursery/kindergarten teacher decreased the score of "work as a member of a school organization" of sustainable volition for learning after nursery teacher training. Practice teachers who want to be non nursery/kindergarten teacher increased the score of "work as a member of a school organization" of sustainable volition for learning after nursery teacher training.

Keywords: nursery teacher training for freshman, practice teacher, image of children, sustainable volition for learning, career planning

*1 Center for Teacher Education and Development, Okayama University

*2 The University of Shimane
